

第四章 研究対象雑誌と読者組織の概要

4-1 創立者・羽仁もと子の生い立ち

羽仁もと子は、1873（明治 6）年、青森県八戸市の士族・松岡忠隆の孫として生まれた。松岡家は由緒ある士族、父の登太郎は養子で弁護士であった。父はもと子が小学生の頃、兄の銀行経営に手を貸し金融関係の事件に巻き込まれたことと、芸妓に溺れたことが原因で離縁となる。しかしながら、登太郎は東北には珍しい才気煥発、博学の紳士であり、斉藤は、「もと子の積極性はこの父親ゆずりのものであったかもしれない」¹⁾としている。こうした幼少時代の体験により、もと子は、「単に受け身に耐えることなく、状況を切り拓く積極的な強さと賢さ」²⁾を身につけた。



図 4-1 羽仁もと子

小学校卒業後、英語の勉強をしながらしばらくは家にいたが、東京遊学を祖父に懇願の末 1889（明治 22）年に上京を果たし、東京都立第一高女 1 回生として入学する。入学後は、学科の勉強よりも初めての都会・東京に深く関心をもつ。在学中にキリスト教を知り、受洗する。

翌年、東京女子高等師範学校受験に失敗、明治女学校へ入学するが、私学は多くの学費が必要である。『女学雑誌』を発行していた校長・巖本善治に手紙を出し学費の減免を懇願した結果、『女学雑誌』の校正の仕事をすることで月謝を免除された。

入学翌年、青森に帰省するが、東京に戻ることなくそのまま退学してしまう。盛岡高女や小学校の教師となるが、この頃恋愛し祖父の反対を押し切って結婚、関西に住まうが半年で離婚をする。

「私はとうとう女中になろうと思って」³⁾ 上京、吉岡弥生⁴⁾ 宅の女中となる。吉岡から「もっとよい仕事につくように、また世に出るように」と励まされ報知新聞の校正係に応募、男性希望者を退け採用される。もと子の実力は直ちに認められ、記者に昇格する。

1901（明治 34）年に結婚する夫の吉一とは、ここで知り合った。結婚後、もと子は退社する。

4-2 『婦人之友』誌の概要

4-2-1 『家庭之友』誌の創刊

1903（明治 36）年 4 月 2 日、長女説子が誕生したその翌日、内外出版協会から吉一と協力して『家庭之友』を発行する。「何も知らない母であり主婦である私の雑誌は、ほとんどそれらについて、専門の知識とすぐれた経験を持っている方々を訪問して、心にあるだけ

の質問を発しては、熱心に教えることでした」⁵⁾とあるように、料理、育児、子供服の作り方、家計等の家庭生活の知識の習得を目指すもと子自身の要求や疑問がそのまま『家庭之友』のテーマとなっていた。

『家庭之友』と併行して、1906（明治 39）年から 2 年間で完結することを目標とした会員制雑誌『家庭女学講義』を出版する。1908（明治 41）年 1 月、郵便規則改正により講義録の送料が高くつくという理由から『家庭女学講義』を『婦人之友』に改題、その後夫妻は 1908（明治 41）年 12 月まで両誌併行して編集に携わった。『家庭之友』はその後手島益雄⁶⁾が引き継いで編集に携わったが、1911（明治 44）年 2 月で廃刊となる。

4-2-2 『婦人之友』誌の特色

三鬼は、「『家庭之友』において「生徒」であったもと子は、『婦人之友』においては啓蒙者としてあらわれてくる」⁷⁾という。内外出版協会から独立し婦人之友社を設立、創刊から続いたもと子による巻頭の論説は、1957（昭和 32）年に 83 歳の生涯を閉じる前年まで続く⁸⁾。論説の内容は、「正面きって婦人解放をこわだかにさけぶのではなく、生活のまわりにある問題を取りあげて、人間としての女の生きかたをしめしたものであった」⁹⁾。

内容の変遷については後述するが、ここでは主な特色を示す。

■体裁

発行当初の『婦人之友』誌は目次がそのまま表紙になっていたが、1911 年に体裁を一新してから、表紙はしばらく平福百穂が担当する。その後毎年著名な画家が入れ替わって表紙を描いている。

創刊当初と戦中を除き、おおよそ巻頭と中ほどにグラビアページが数ページあるほかは、モノクロページである。

判型は創刊当初から＜A5 判＞である。『主婦の友』など多くの婦人雑誌は 1950 年代に＜B5 判＞化、その後＜AB 判＞や＜A4・A4 変型判＞が主流を占めるようになったが、『婦人之友』は変わることはなかった。こうした判型の大型化は、女性雑誌が有力な広告媒体であるからである¹⁰⁾。ヒヤリングでは「『婦人之友』誌の広告は、大手広告代理店を通してはいるが、自由学園¹¹⁾ 卒業生などの関連企業も多い」¹²⁾という。



図 4-2 『婦人之友』1930（昭和 15）年 12 月号



図 4-3 『婦人之友』1945（昭和 20）年 8・9 月合併号



図 4-4 『婦人之友』1978（昭和 53）年 9 月号



図 4-5 『婦人之友』2003（平成 15）年 10 月号

■内容

巻頭のグラビアページのあとに、羽仁もと子の巻頭文が載る¹³⁾。その他の部分は時代によってまちまちではあるが、おおよそ特集記事、座談会、世相を反映した記事、政治・経済の記事、手記、衣食住、子育て、家計、小説、エッセイ、読者投稿、映画・本紹介、友の会関連記事、自由学園関連記事、編集後記等が載る。



図 4-6 『婦人之友』1956（昭和31）年3月号目次

■読者層

神間らは、明治末期から昭和20年までの『婦人之友』誌の家計関連記事から、その読者家庭の収入の状況や持ち家・使用人の有無を調べ、読者層の実像を明らかにしている¹⁴⁾。それによれば、創刊当初の読者の世帯主は、大都市に住む医師、歯科医師、公務員、教員、軍人、会社員で、年収は500円から1800円の間に集中しているという。当初は「中流」の中でもとくに教養の高い層に読者が多かったが、昭和の読者は職業や経済において拡がりを見せたとしている。

近年の読者層は明らかではないが、読者組織である『友の会』については「地方都市ではステータス」¹⁵⁾、「お金持ちのおばさまの貧乏ごっこ」¹⁶⁾といった声があることから、少なくとも読者組織は、第三者によって富裕層の妻たちによる組織と受け止められているようである。

■発行部数

創刊当初の発行部数は、婦人之友社にも記録がないというが、婦人之友編集に携わった山室の本¹⁷⁾に『『雑誌の読者の少ない当時のこと、多分2、3千部も発行してはいない』との同業者の推察』の記述がある。さらに、久保の調査では「戦前には6～7万部、戦後は12～13万部を発行していた」¹⁸⁾という。

近年の発行部数は表4-1のとおりである。久保の調査結果から40～50年を経ておよそ1万部の減少である。他の婦人雑誌が極端に減少し廃刊に追い込まれているものもある中で、『婦人之友』誌の発行部数は、減少しているといえどもごく僅かである。

表 4-1 主な婦人雑誌の発行部数（単位：万部）

	1966	1972	1979	1992	1996	2000	2002
婦人之友				11.3	11.3	11.3	11.2
主婦の友	62.5	65.6	50.7	8.2	50	33	17
主婦と生活	60.3	70.6	50.2	21	93 年廃刊		
婦人公論	29	19.1	36.8	18.5	24.4	19.7	16.9
婦人倶楽部	69.2	73.5	44.3	88 年廃刊			
婦人画報				30	17.3	18.5	18.7

岡満男『婦人雑誌ジャーナリズム』（現代ジャーナリズム出版会）他から筆者が作成。空欄は不明

■家計簿

『家庭之友』創刊の翌年、羽仁もと子が発案した家計簿『羽仁もと子案家計簿』が発刊された。以降、戦時を除いて現在まで、毎年年末に発行している。

これは他の家計簿と異なり、1 年の全収入を予測したうえで、費目ごとの予算をたてるという特徴がある。

1958（昭和 33）年から毎 12 月号が「家計特集号」となり、家計に関する記事が増える。

表 4-2 『婦人之友』誌および『友の会』関係年表

西暦	婦人之友関連	友の会関連
1903	『家庭之友』創刊	
1904	『家計簿』発行	
1906	『家庭女学講義』創刊	
1908	『婦人之友』創刊	
1923	読者組合組織	
1926	座談会始まる	
1927	『羽仁もと子著作集』発行	大阪、松本などで『友の会』誕生
1930	予約販売開始	全国友の会成立
1931		家庭生活合理化展覧会開催
1934		家事家計講習会開始
1935		東北セトルメント開始
1936	「1人分1軒分の持ち物標準」発表	
1938		幼児生活展覧会開催
1939		各地友の会に幼児生活団設立
1940		全国大会は非常時大会。 「貯金のできる楽しき家庭生活」展覧会開催
1943		全国大会中止
1944	回読組合	全国大会中止
1946	乳幼児グループ、家計簿をつけ通す同盟誕生	引揚者救援事業開始、農村文化運動相談
1947	グループ住宅提案	農閑期衣食住生活学校開始
1950		「われらの衣食住」展覧会開催
1954		こどもの食べものきもの展覧会開催 愛土生産運動開始
1955	羽仁吉一死去	
1957	羽仁もと子死去	
1958	「創立者のことば」巻頭連載開始	
1959		時間調べ開始（ほぼ5年おき）
1960		11,000人の主婦の創った家庭生活展覧会開催
1962		財団法人全国友の会振興財団設立
1972	環境問題記事掲載	
1973	『明日の友』創刊	「われらの衣食住」展覧会開催 「生活即教育」展開催
1983		バングラディシュとの台所交流開始
1992	『明日の友』隔月発刊に	
1995	阪神大震災救援活動	
1997	『ふたりをみがく生活読本』創刊	
2003	表紙一新	

4-3 『全国友の会』の概要

4-3-1 設置の経緯

山室は、送り手と受け手の協働の場となるべき下地が、すでに『家庭之友』にあったと指摘している¹⁹⁾。例えば『家庭之友』第4号の「禁酒美談」は、夫の大酒飲みを止めさせた女性の実話に基づいて書かれたものだが、もと子はそれ以前から親類縁者にも了解を求めて酒のもてなしを一切廃していた。山室は、こうした「言行を一にする記者の良心が読者との距離を近づけ『友情』ともいうべき親しい関係を作りだした。読者組織のきざしは早くもここに見られる」²⁰⁾としている。

1908（明治41）年発行の『婦人之友』1巻9月号には、読者会開催の告知が載っている。

羽仁もと子が『友の会』の前身となる「読者組合」の構想を打ち立てたのは、1922（大正11）年の秋である。これはやがて、1927（昭和2）年の、羽仁もと子の著作集刊行を機に解散する。

1927（昭和2）年から各地で設立が始まった『友の会』は、活動内容を各地の自由にまかせたゆるやかな連合組織であった。1930（昭和5）年11月に開催された第1回大会時、『友の会』総数39、会員約1000名、大会に参加したのはこのうち代表の80名であった。



図4-7 1930（昭和5）年開催 全国友の会成立第1回大会

このとき以下の決議がなされた。

- 一、私どもは家庭における封建的個人的気風を清算して、愛、自由、協力による新家庭精神の樹立に努力します。
- 一、私どもは志を同じうする女性の団結によって、愛、自由、協力による新社会の建設に努力します。
- 一、私どもはそのために、各人の有する機会、才能及び労力をおしみなく捧げんことを

約束します。

以下に、現在の『友の会』の概要を述べる。

4-3-2 家庭生活の合理化

『友の会』成立の翌年の1931（昭和6）年、婦人之友社と自由学園の協力を得て開催した「家庭生活合理化展」では、4人22坪半の小さな住宅や、和洋区別のない食器などを具体的に展示した。

この展覧会のスローガンは、「家庭より社会へ！ 一步をすすめよ」、「孤立より協力へ」、「小より大へ」である。これらは、羽仁もと子の、「家庭は社会的に責任のあるもの、つまり人間生活の基礎工事を行なうのに最もよい場所は家庭であり、家庭生活を合理的にすることで、社会が合理的になる」という考え方による。

さらにその工事をする時期は赤坊から子どもの時代であり、工事は母の手によるものだというのである。

この考え方に従って、『友の会』では、子育てや家計・時間管理を含む家庭生活を、合理的かつ丁寧に行うための研究に励んでいる。

4-3-3 組織構造

『友の会』は、2005年2月現在会員数22,352名によって組織されている。全国に192の各地『友の会』があり、それぞれに「方面会（ほうめんかい）」、「最寄会（もよりかい）」が下部組織として存在する。

現在、全国に10の部と「中央部」があり、各部から選ばれた委員と東京常任の中央部、同じ創立者によって設立された婦人之友社と自由学園から選ばれた委員によって運営されている。

13の『友の会』が、「幼児生活団」を持っている。これは就学前の保育所のようなものである。『友の会』会員以外でも子どもを預けることは可能である。開催日や活動内容は各地『友の会』によって異なる。

「南彦根最寄」の属する地区を中心に、その構成を図4-8に示す。このうち「職業」というのは職業を持って平日集まれない人たちによるグループである。

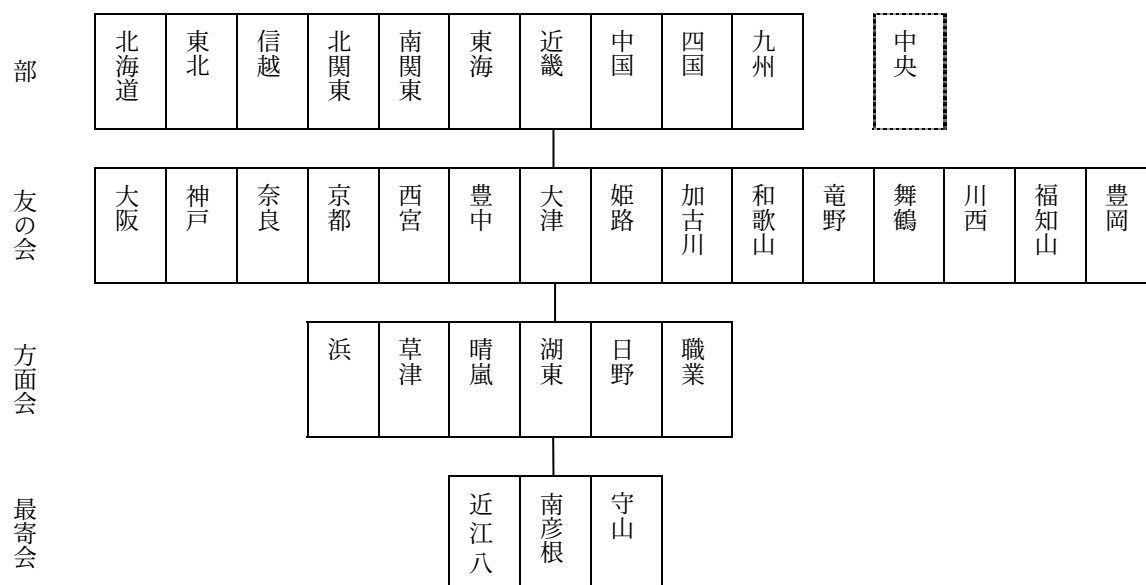


図 4-8 『友の会』 構成図

4-3-4 主な活動

各地の『友の会』は、「友の家」と呼ばれる施設もち、そこで定例の例会や委員会やサークル等各種会合、友の会主催の講習会等に使う。

会費は各地の『友の会』によって異なるが、1ヶ月およそ 1000 円程度である。会費の他に「われらの公共費」も徴収されるが任意である。これは、災害支援等に寄付される。

月に一度開催される例会では、最初に賛美歌を歌い、『婦人之友』誌や『羽仁もと子著作集』の中から、予め決めておいた箇所の読書とその感想発表、衣食住や家計簿記帳の実践発表、「方面会」や「最寄会」での活動報告や、各部からの連絡事項を伝える。例会はたいいてい午前 10 時開始でお昼頃に終了、その後当番の作った昼食をみんなで食べる。例会の間、小さな子どもは託児当番が面倒をみる。

「方面会」では、「最寄会」で勉強してきたことの照らし合わせや、地域へのはたらきかけの方法などを決める。「最寄会」では、近くに住む者同士数人が集まって、読書と衣食住や家計簿記帳等の生活研究を行なう。

友の会の活動は各地によってまちまちであるが、「大津友の会」では以下の「集まり」（自主サークル活動のようなもの）がある。

表 4-3 大津友の会「集まり」一覧

名称	内容
乳幼児グループ	就園前の子どもをもつ母の会
子ども部	小学生から大学生まで子どもの生活を考える集まり
野の花グループ	高年の愛読者の会
愛土	園芸、栽培を楽しむ会
手しごとの会	洋裁、手芸から衣のことを研究する会
創作工芸	生活の中から生まれる工芸
「食」の勉強会	毎日の食事を基本から考える
生産	クッキー、ケーキ、パンの生産・販売

4-3-5 家計簿記帳

家計簿の記帳は、『友の会』にとって重要な活動である。「家計簿記帳のおかげで家が建った」などの成功記は各地友の会から各部や中央部、婦人之友社に伝わって、『婦人之友』誌に「実例」として載ることがある。雑誌に載らなくても、例会等で発表する機会もあり、これも「実例」と呼ばれる。

「家計のことを勉強したい」といって会員になる人がいる一方で、「家計を見せるのはいやだ」、「面倒だ」といってやめる人も多い²¹⁾。

家計簿記帳の考え方は、以下の羽仁もと子の文章に基づく。

私どもはとにかく数理思想にとぼしいところから、我が家の生活に毎月、何ほどの費用がいるということだけ分かっていても、米は平均何ほど、ガス、電気その他の燃料は何ほど、味噌、醤油、砂糖、かつおぶしは何ほどというようなことまで明瞭に分かっている方は少ないでしょう。衣服、住居にいたってはなおさらだと思います。

まず何よりも目下の入用からして分かていかなければ、どこをどう改良しようかということもわかりようはずはありません。私どもはもうすこし数理的頭脳がほしいと思います。2人また3人の主婦が申し合わせて、いろいろの統計をとってみたら、たいてい同じくらいの生活程度であるのに、自分の家では格別に燃料を使い過ぎているといい、また少ししかいていないのに、平生にこういうところに注意するためだろうとかいうことがわかり家政をとる上に実に大きな利益があろうと思います²²⁾。

1955（昭和 30）年から毎年会員の家計簿データを集めて集計している。提出数は会員数のおよそ半分である。

4-3-6 活動費

各地友の会の活動維持のための主たる収入は、地域で開催する「家事家計講習会」や「生活基礎講習会」等の講習会や、音楽会などを主催した際の参加費である。

各地友の会が所有する「友の家」の建設は、最も大きな出費事業であるが、講習会等開催の収益のほか、会員の醵金（寄付金）、会債の発行などによって賄われている²³⁾。例えば、1967（昭和 42）年落成の長崎友の会の友の家の建設収支は、表 4-4 に示すとおりである²⁴⁾。

表 4-4 長崎友の家建設収支（単位：千円）

準備金	借入金	協力経済	1,000
		会債	1,080
	寄付		170
	繰越金		1,600
	預金利子		53
支出	建設費		3,502
	設備費		240
	雑費		157

各地友の会がそれぞれ家を持つようになったことに関して、家と土地の最もよい管理の方法を追究した結果、振興財団にすることが妥当と考え、1962（昭和 37）年に「財団法人全国友の会振興財団」としての設立を申請、認可を受けている²⁵⁾。これによって、各地の「友の家」の建物と土地は、法律上は財団の所有となっている。

4-3-7 会員数の減少

『友の会』は、1984 年 31,622 名をピークに会員数が減っている（図 4-9）。図 4 - 10 が示すとおり、1992 年以降、退会者数が入会者数を越えている。たとえば、2004 年度退会原因の半分を、就業（30％）と介護や家庭の事情（25％）が占めている²⁶⁾。

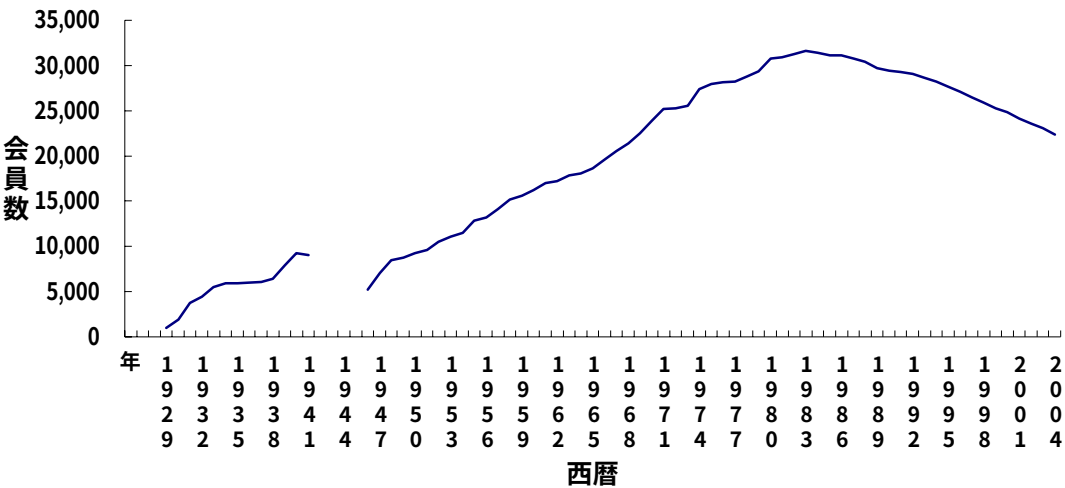


図 4-9 『友の会』会員数増減グラフ²⁷⁾

図 4 - 10 のグラフのうち、転入者と転出者の増減をみてみよう。『友の会』は転勤族の妻たちが多く、引っ越した先でその地域の『友の会』に入ること、知らない土地での不安が取り除かれるという。この 2 者を比べてみると、その差は縮まりつつあるものの、も

ともとの会員数が減少しているため、減少を食い止めるほどには到っていない。
死亡する会員も、わずかに増えている。

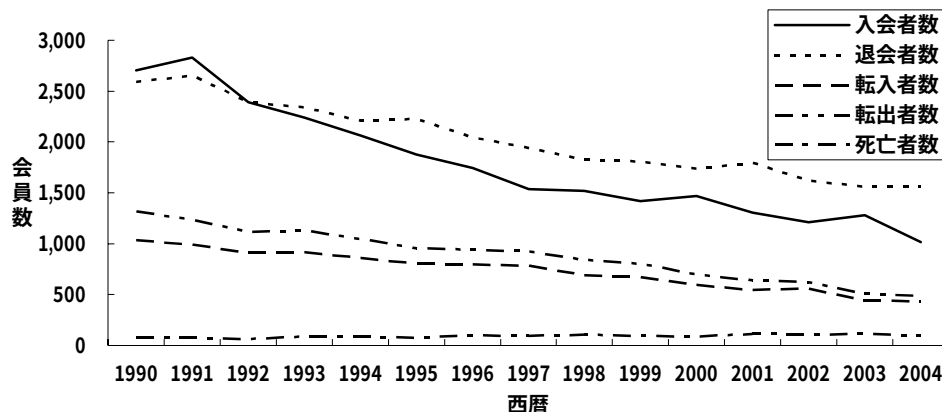


図 4-10 『友の会』 1990 年から 2004 年における会員移動推移グラフ ²⁸⁾

会員数の減少は、全国大会や、『友の会』の会報紙である『友の新聞』ではたびたび話題になっている。食い止めるための手段として、たとえば、講習会にたくさん来てもらい、わかりやすい講義をして入会に導くために、開示する資料をいつ/どんな風に見せればいいのかといった細かなことも議論する。

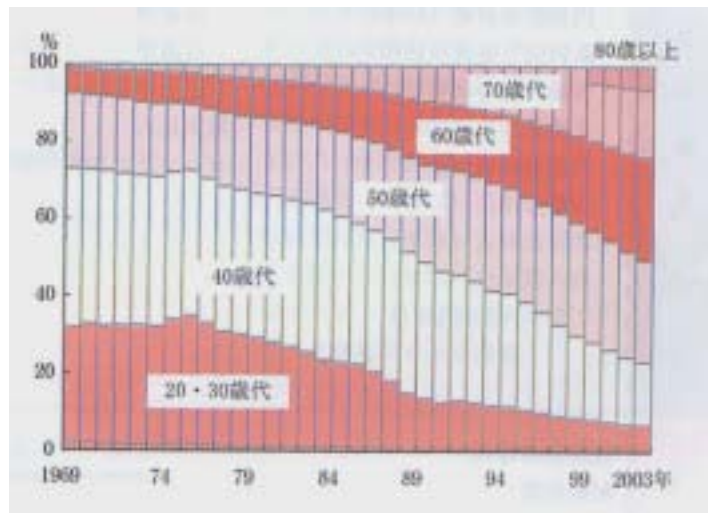


図 4-11 『友の会』 家計報告年代別集計数変化グラフ ²⁹⁾

図 4-11 は、『友の会』の定例活動である家計簿の集計結果の一部「年代別集計数の変化」である。ここから、次のいずれかの様相が読み取れる。すなわち、会員の平均年齢の高齢化と若年層の新規参加の停滞、あるいは高齢会員が真面目に集計用データを提出する一方で若年層会員の提出率がこれに及ばないという様相である。

こうした変化に関して Mさんは、「『会員なら家計簿をつけるのが義務』といわれた時代

がある。今も言う人もいるけど、それを言うとやめていってしまう」³⁰⁾と会員獲得の難しさを嘆くのである。

40年間の生活時間の推移 (1959～1999年)

年	睡眠	家事	子供	家務	娯楽・友の会
1959	661	442	31	294	49 67 96
1965	456	158	405	37 65 61 55 87	114
1970	451	151	401	40 32 64 54 67 57 113	
1973	447	145	370	37 64 61 52 81 16 117	
1979	445	144	374	58 69 56 48 86 21 111	
1984	433	147	372	78 69 50 54 111 22 104	
1989	430	151	355	75 71 47 53 111 22 114	
1994	429	179	325	65 67 45 68 114 18 130	
1999	420	196	317	58 62 39 68 120 19 144	

1日 1440分 単位＝分

図 4-12 生活時間調べ結果 ³¹⁾

図 4-12 は『友の会』が 5 年おきに行なっている「生活時間調べ」の集計結果である。40 年余りの間で、家電製品の普及や家事の研究成果により家事の時間は減っているが、そのぶん『友の会』に拘束される時間が増えている。役員になると週に 2～3 日は『友の会』の活動があり、こうした忙しさも会員減少の原因であるという。

『友の会』の会員ではないが、子どもを幼児生活団に入れていたため少しかかわったことがあるという H さんは、「自分の興味は家庭の外に出て行くことだったから入りませんでした。家事や家計のこと、合理的な生活を極めることはとても重要ではありますが、家の中のことだけを研究し続けるのは自分にはつらい。また、友の会の活動自体、かなり忙しいことを知っていたので入会はしなかった」³²⁾という。たとえ時間ができても「家で実践できることだけでもする、友誌（『婦人之友』の略称）を読むくらいでしょうか」³³⁾という。

このように、「『友の会』の活動のよさは認めるが、集団で活動はできない」という人たちは、自らを「ひとり友の会」と呼んでいるようである ³⁴⁾。

つまり近年の『友の会』では、会員数の減少が大きな問題となっているが、若い人の中には、集団で行なう『友の会』活動に拒否反応を示しても、参考にすべきことはやっている、あるいは時間があればやってみたいという人がいないわけではないのである。

以上、『婦人之友』誌と『友の会』の概要をまとめた。

次章では、実際の誌面の分析により、その変遷を明らかにしていく。

【註釈・引用】

- 1) 斉藤道子：羽仁もと子―生涯と思想，p12，ドメス出版（1988）
- 2) 斉藤道子：前掲書 p13（1988）
- 3) 羽仁もと子：羽仁もと子著作集第十四巻，p67，婦人之友社（1928）
- 4) 東京女子医科大学創立者
- 5) 羽仁もと子：前掲書 p85，婦人之友社（1928）
- 6) 初期『愛国婦人』の編集者で、『新婦人』の主幹
- 7) 近代女性文化史研究会編：婦人雑誌の夜明け，大空社，p97（1989）
- 8) ただし、1956（昭和 31）年 8 月号は過去に認めた手紙文が載り、9 月号では娘・恵子が「母のこの頃」というタイトルで、その近況を知らせている。
- 9) 岡満男：婦人雑誌ジャーナリズム，p43，現代ジャーナリズム出版会（1981）
- 10) 川井良介：戦後雑誌の判型，山梨英和短期大学紀要，30 巻，pp248-230（1996）
- 11) 羽仁もと子が 1921（大正 10）年に創立した学校。現在も、幼児生活団・初等部・男子部中等科・女子部中等科・高等科・最高学部がある。婦人之友社、自由学園、全国友の会が一緒になって活動することが多い。
- 12) Y さん：2005-12-14，私信
- 13) 近年この体裁はくずれてきているが、これについては後述する。
- 14) 神間稔子・小川正光：『婦人之友』の家計記事による読者層の属性に関する検討，愛知教育大学家政学教室研究紀要，第 20 号，pp53-62（1989）
- 15) M さん，2006-1-5，私信
- 16) 婦人之友の「友の会」ってどう？
<<http://life7.2ch.net/test/read.cgi/baby/1091663920/-100>>，2005-1-27
- 17) 山室徳子：20 世紀初頭女性へのメッセージ 『婦人之友』にみる生活・家庭観，p259，ドメス出版（1991）
- 18) 久保加津代：都市「中流住宅」における生活者の住居観と生活改善一大正期を中心とするデモクラシー期の『婦人之友』誌の分析をとおして一，奈良女子大学大学院人間文化研究科学術博士論文，p9（1995）
- 19) 山室徳子：前掲書，pp255-256，ドメス出版（1991）
- 20) 山室徳子：前掲書，p256，ドメス出版（1991）
- 21) M さん：2006-1-5，私信
- 22) 羽仁もと子：羽仁もと子著作集第 9 巻 家事家計篇，p210，婦人之友社（1927）
- 23) Y さん：2004-9-3，私信
- 24) 長崎友の会：長崎友の会成立 40 周年を記念して，p32，長崎友の会（1972）
- 25) 全国友の会：70 周年記念 全国友の会小史，p90，全国友の会（2000）
- 26) 全国友の会：友の新聞，友の新聞発行所，第 587 号，p1（2005）
- 27) 『友の新聞』年度末発行号データより筆者が作成
- 28) 『友の新聞』年度末発行号データより筆者が作成
- 29) 全国友の会：全国友の会家計報告 半世紀のまとめと拡がる生活研究，p7，全国友の会（2004）
- 30) M さん：2006-1-5，私信
- 31) 全国友の会：全国友の会 70 年の歩み 会員がつづる創立から現在まで，p293，全国友の会（2000）
- 32) H さん：RE：生活団のこと，2005-12-20，私信
- 33) H さん：RE：生活団のこと，2005-12-20，私信
- 34) 婦人之友の「友の会」ってどう？

<<http://life7.2ch.net/test/read.cgi/baby/1091663920/-100>>, 2005-1-27

【参考文献】

- 羽仁もと子：羽仁もと子著作集 第十四巻 半生を語る，婦人之友社（1928）
- 斉藤道子：羽仁もと子一生涯と思想，ドメス出版（1988）
- 志垣寛：女流教育家評伝その八 羽仁もと子，家庭科教育，29 巻，8 号，pp80-83（1955）
- 近代女性文化史研究会編：婦人雑誌の夜明け，大空社（1989）
- 玉井朋：良妻賢母論の受容と「家庭」（ホーム）の形成—明治後半期の『家庭之友』『家庭女学講義』『婦人之友』を中心に—，日本大学大学院芸術学研究科文芸学専攻研究論文集『藝文攷』，9 号，pp21-34（2004）